
赤い薔薇

鹿野 魁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い薔薇

【Nコード】

N8294E

【作者名】

鹿野 魁

【あらすじ】

「薔薇がどうして赤いか知ってますか？」俺の前に現れた男は、いきなりそう言った。男が語る、薔薇が赤い理由とは？

【どこかの国の酒場にて】

「薔薇がどうして赤いか知ってますか？」

視線を上げるとそこには男が立っていた。

声の高さで男と分かっただけで、遠目から見たらきつと女と見間違えていただろうと思う。なぜならそいつは、髪が腰まで長い上に女みたいに顔が整ってたからだ。

「……僕の話、聞いてます？」

俺が見とれていると、じれったくなつたのか、男はもう一度声をかけてきた。確かにこの喧騒の中じゃ、確認したくもなるだろう。

「ああ、ちゃんと聞こえてるさ」

俺がジョッキに残っていたビールを飲み干していると、男は勝手に俺の正面に座った。

軽くにらんでみるが、男は気にする様子無く酒を注文している。

「おい」

「はい？」

「誰が座って良いと言った」

男と飲む趣味は無い。

俺が凄みを効かせてこう言っても、男はやはり、動じる様子はない。

第一印象はもちろん、変な奴、だ。

そうこうしているうちに、男のもとに酒が運ばれてきた。今だけは回転の速いこの店が恨めしい。

俺は諦めてため息をつく、酒を飲みだした男を観察することにした。

長い髪は亜麻色で、見ただけでも艶がいいことが分かる。多分、女たちは悔しがって見るだろうな。目もきつと同じ色。……曖昧な

のは俺が一瞬しか男の目を見なかったせいだ。男の目を見つめるだなんて、気持ち悪くて俺には出来ない。

服はゆとりがあるが、足元などは動きやすいようになっている。傍に荷物が置いてあるから旅をしているんだろう。そういえば服の細かい装飾は異国の物だ。

「んで、俺に何の用だ」

仕方が無しに質問してやると、男はうれしそうにジョッキを置いた。

「用、と言うわけでは無いのですが、暇つぶしに付き合ってもらおうと思ひまして」

「暇つぶし？」

唇を湿らそうとジョッキに手をのばすが、さっき飲みきったのだから中身は空だ。

俺は軽く手を挙げて、酒を注文した。ここは馴染みの店だから、俺の好みは良く知っている。

「ええ。僕は話すことが好きなんです、生憎と旅の身。相手がいないです。ですから、一人寂しくお酒を飲んでいるあなたに相手になってもらおうかと」

「あんたが女の代わりになってくれるのか」

一人寂しく、と言われたお返しに髪のことを言っただけ。けれど言われ慣れているのか、男は軽く笑っただけで受け流した。

「それで最初の言葉に戻るわけですが、薔薇が赤い由来を聞きますか？」

「あんた、吟遊詩人か？」

質問に質問を返すのもどうかと一瞬思ったが、こいつなら気にしないだろうと思ひ直して聞いた。

「いえ、違いますよ。先ほど言ったとおりのただの旅人です」

吟遊詩人なら金を払わなければいけないだろうと思ひて聞いたが、これなら後で大金を請求されることも無いだろう。

とうの昔に運ばれていたジョッキを手に取り、俺は答えた。

「まあ、暇つぶしに聞いてやるよ」
酒を一杯飲み干すぐらいの時間なら、俺にだってある。

【薔薇が赤い理由】

昔々、ある国には美しい王女がいた。

それはそれは美しい姫君で、多くの男が嫁にしたいと望んだが、王女であるために平民の男たちは諦めざるを得なかった。貴族や他国の王族の者からもちろん求婚されていたが、王女の父である国王が許さなかった。

王女は庭に白薔薇を植えていたため、「白薔薇の姫」と呼ばれ、民に親しまれていた。それにちなんでか、王女を守るための近衛隊は、いつしか「白薔薇騎士団」と呼ばれるようになっていた。

王女には、ことさら気に入っている一人の騎士がいた。彼は貴族の出身でありながら、幼いころから王女を守り、王女のために尽くしていた。

王女も騎士も隠してはいたが、周りから見れば愛し合っているのは周知の事実だった。国王も、騎士の誠実さを知っているためか、二人の恋に何の口出しもしなかった。実は国王は、自分の娘が愛し合っている人と結婚することを望んで、そのために他の男たちからの求婚を跳ね除けていたらしい。

しかし、妬む者は現れる。騎士はその者の陰謀によって、辺境の地へ行かなければならなくなった。そこは戦いが一番激しい地。命を落とすかもしれない任務だった。

騎士が城を発つ先日の夜。王女と騎士は、庭でこっそりと逢瀬を交わしていた。王女は自分の指が汚れることも厭わず薔薇を手折ると、騎士に差し出した。

「あなた様に、この薔薇をお預けします。わたくしの分身であるこの白薔薇を、必ずわたくしの元へお届け下さい」

騎士は薔薇を受け取ると、恭しく王女の手の中へ口付けた。

「この薔薇に誓って、必ずやお届けいたしますよう」

騎士が手を当てた鎧の左胸には、白薔薇騎士団独特の、白薔薇の装飾があつた。

戦いは幾日も続いた。しかし、騎士の働きによつて、確実に戦いは終わりへと向かつていた。

峠での戦い。騎士は誰よりも勇ましく、誰よりも先陣を駆けて戦つた。長い戦いの末に、ついに勝利を収めた騎士勢。他の男たちが勝利に酔いしれ、喜んでいる横で、一人の男が壁に寄りかかつて座つていた。

その男は鎧を自らの血で染め、息も絶え絶えな状態だつた。一番勇敢に戦つた男の左胸についていた薔薇は、鎧から離れ血に落ちていた。

「おい、王都に帰るんだろ？ 起きろよ」

一番親しい戦友の言葉に男は顔をあげた。

「もちろん帰るさ。約束したんだ。……でも、その前にこの薔薇を先に姫の元へと届けてくれないか」

男は震える腕で、薔薇の装飾を戦友に渡した。

「お前も後から来るんだろう？」

男はもう、戦友の言葉に反応を返さなかつた。

戦友は一度硬く目をつぶると、薔薇の装飾を男の服の切れ端で包んで立ち上がった。

戦友はひたすら馬で駆けた。何度も馬を乗り潰し、その度に馬を買い換えながら駆け続けた。

騎士の帰りを待っているだろう王女の元に、一分でも一秒でも早く辿り着けるように。一分でも一秒でも早く友との約束を果たせる

ように。

本来の半分の時間で王都に辿り着いた戦友は、すぐさま城に向かった。

血に汚れた格好のままで城に入れるとは思ってなかったが、騎士の名前を告げると、近衛長の取り計らいで王女に会えることとなった。

王女は血に汚れた姿に小さく息を呑みながらも、震える声で尋ねた。

「彼は……どうなったのです？」

戦友は跪きながら答えた。

「奴は殿下との約束を果たすために、私にこれを預けました」

戦友が差し出した包みを開けた王女は、その場に泣き崩れた。

王女のもとへと届けられた薔薇の装飾は、騎士の血で真っ赤に染まっていた。

【どこかの国の酒場にて】

「とまあ、こんな具合で薔薇が赤くなっただんですって」

いつの間にか話に引き込まれていた俺は、男のその言葉で我に返った。周りの喧騒が戻ってくる。

「結構、悲しい話なんだな」

手に持っていたジョッキには、まだ半分以上も酒が残っていた。

「その後は、どうなったんだ？」

一口飲んだ後に、俺は聞いた。

「その後、とは？」

「白薔薇の姫は、やっぱり白薔薇のままだったのか？」

こんな質問をされるのは初めてだったのか、男は軽く目を見張った。

「……さあ。残念ながらそのことについては僕も知りません。ただ」

「ただ？」

「その後戦友は、騎士の話を残すために旅に出たそうですよ」

飲みながら聞いていた俺は、そのせいで質問するタイミングを逃してしまった。

俺が口に含んでいた酒を飲み込んだころには、男は既に代金を置いて立ち去るところだった。

「おい！」

腰を浮かせて声をかけると、男はなんでしょう。と言わんばかりに首を軽く傾けた。

「今の話……どこまでが本当だ？」

言葉を選びながら聞くと、男はやっぱり微笑を浮かべながら答えた。

「この店の酒は、強いですから」

(後書き)

08/08/10 投稿

08/08/12 推敲(文末部分)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8294e/>

赤い薔薇

2010年10月8日15時15分発行